

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	松井 梓
論文題目	モザンビーク島の隣人関係の繋がり と切断に関する人類学的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>モザンビーク島では、狭小な居住地区に人びとが稠密に暮らす。女性たちは隣人たちに関心を持ち、皿に盛った料理を日々交換するほどの親密なつきあいがあると同時に、濃密なゴシップが行きかう。その関係は固着せず柔軟に組み替えられ、ゴシップの渦中でも関係が険悪になりすぎず、派閥化も起きづらい。本論文の目的は、島自体の固有性に加えて、関係が緊密で固定的な村落社会とも、より流動性が高い大都市周辺部とも異なる、その双方の特徴を併せ持っている近隣関係が生まれる動態を、第一に島が置かれた歴史や環境、空間の特徴や生業の時間性との関わりあいから、第二に島の女性たちの対他的な身構えから、明らかにすることである。</p> <p>序章では、環境や他者との関わりあいのなかで個人の行為を捉える先行研究を示し、同時にそこから自らを切り離す実践とその曖昧さを描くことの重要性を述べた。アフリカ地域研究は社会の不確実性を前提に、集団に依存しつつも自律する個人を描いてきたことに触れ、女性たちの近所づきあいというミクロな状況を、歴史を通して形成された空間や時間性の下で人びとが暮らすことで織り成される集合性の次元と個々人との関わりあいのなかで捉えるための枠組を示した。</p> <p>第1章では、本論文の対象である女性たちが暮らすモザンビーク島とマクア・ナハラの人びとの歴史的背景を詳述した。同島は、アラブ・スワヒリ商人らの交易拠点となり、その後ポルトガル人のインド洋航路上の要衝となり、植民地行政の中心となった。歴史の変遷のなかで異なる出自や文化を持つ人びとがまじりあい、マクア・ナハラと呼ばれる集団が形成され、女性たちには「美しく、洗練された」イメージが付された。だが今日その重要性を失い、島は間延びした時間の流れる漁村となっている。</p> <p>第2章では、本研究が対象とする島の南半分を占める居住区、バイロの形成史を述べ、流動的なバイロの近所づきあいは、「原住民」の統治と管理が意図された均質的かつ見通しのよい居住空間の特徴と、そこへの人びとの参加が絡みあうなかで生まれたことを示した。バイロは「建てることの視点」にもとづき、統治上の要請にかなうように計画され形作られた空間だが、今日その意味付けは忘れ去られ、人びとに「住まわれ」ており、バイロの空間を理解するためには、そうした多層的な空間のありようを統合して論じなければならないことを示した。</p> <p>第3章では、自然環境、生業、食のあり方が、いかにバイロの女性たちの生計や隣人との関わりに作用するかを論じた。農地のない小さな島では、漁業がもたらす現金が経済の末端まで行き渡るため、人びとの生計は漁獲の季節的変動や天候に左右され</p>			

る。また農産物は遠隔地から運ばれ基本的にすべて現金で購入されるが、価格は割高となる。自然環境、天候と漁獲の変動、生業構造と食のあり方が生計に直接作用し、隣人との食物の授受を引き起こしては途絶えさせるという波を生む。だが同時に、必ず訪れる漁獲の回復は生計に長期的な確実性と間延びしたリズムをもたらしていた。

第4章は、ひとつの住居内での共住と食の授受がいかに行われるかを考察した。全体では妻方の母系親族と一つの世帯を構成して共住し、食事に関して生計を同一にしている場合が多かった。他方、非親族相互の共住では相手の生計の苦しさをすべて受け止めようとせず、相互の境界を保っていた。バイロの居住空間の共有と食というサブスタンスの授受は強い繋がりを生むものではなく、その関係は柔軟に組み替わっていた。

第5章では、バイロの女性たちの隣人どうしの関係が繋がりと切り離される動態を描き出した。生活の必要とともに親しい関わりを求めて、女性たちは会話や食の授受などを通じて隣人と繋がっていく。他方で、両者間の摩擦やゴシップ、食の授受に生じた不均衡、転居などによって、関係が切り離されていた。女性たちが、摩擦やゴシップ、関係の変転という煩わしさのなかでも隣人と関わらなければ落ち着かず、それを求めないではいられない様を描いた。

第6章は、バイロの稠密な居住空間でゴシップがしきりに飛び交うなか、女性たちがどのような身構えをもって共在しているのかを明らかにした。バイロの女性たちの隣人との関わりは流動的で、それぞれの交際圏は小さい。加えて女性たちは、日々の会話や食の授受などを通じ隣人と緊密に接し繋がろうとしよう一方で、強い心理的な結びつきや連帯を求めすぎない、みずからを相手に「委ねすぎない」身構えをもつ。この流動的な共在の空間の動態と、女性たちの身構えこそが、女性たちが次々と生まれるゴシップを放っておきながら共在することを可能にしていた。

終章では、バイロの隣人関係の繋がりと切断のリズムは、バイロを取り巻く自然環境、歴史、居住空間の特徴、生計のリズム、食や共住のあり方、そして隣人たちが関わりあって生じていることを述べた。しかし、この集合性の次元でやむを得ず生じるように見える繋がりと切断の渦中には、女性たちが関係を切り離したり、調整したり、放っておいたりする、複層的で曖昧な切断の実践や身構えがあり、これこそがバイロの女性たちの濃密な関係性を支えていた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、東アフリカ・インド洋岸のスワヒリ文化圏の南端に位置する古都モザンビーク島という特徴的な島に注目し、同島に住む女性たちの隣人との関係を参与観察、聞き取り、史資料調査など多面的な方法を通じて詳細に描き出した独自性、希少性の高い民族誌の業績である。

本論文の主な学問的貢献は以下3点に集約できる。第一に、近年の人類学では、常に揺れ動く環境のなかで人の行為が生成される動態を、その連関のなかで捉える議論がひとつの潮流となるなか、繋がりと表裏をなす切り離す行為や身構えを、女性たちの近所づきあいというマイクロな場面から詳細に描いた点で独創的である。本論文では、女性たちの隣人との関係が、歴史、環境や他者と関わりあいながら絶えず緊張とその解消という二つのベクトルを孕みながら変転する集合性の次元を描いたうえで、そこから線を引いたり、距離を調整したり、放っておくことで同時にみずからを切り離す女性たちの、複層的でかつ曖昧さも含む切断の実践や身構えが描かれた。環境や他者との繋がりもそこから切り離す個人の輪郭も明確なものではなく、曖昧で複層的な切り離しの実践によって保たれるという著者の議論は、環境と個人の相互作用及びその変化を巡る議論に示唆を与えるものである。

第二に、社会の不確実性を前提に、人びとが集団に依存しながら自律し他者と共生する姿を描いてきたアフリカ地域研究に対し、上述のように繋がりの中の複層的な切り離しに着目した点と、近所づきあいという日常を注視した点においてユニークな貢献をしている。これまでアフリカ研究では、人びとが権威に従属することで自由を得、あるいは都市の商人や牧畜民などが仲間や敵対する相手との流動的な関係のなかで自他の境界を保つなど、関係のなかに身を置きつつ〈個〉としてある姿が描かれた。本論文は、ともすれば取るに足らない事象とされ光が当てられてこなかった、女性たちの近所づきあいというごく日常的な場面を一貫して描いた。目の前に住み毎日顔を合わせる相手だからこそ、ときに強い心理的紐帯を求めてしまいうる。また相手の経済状況も垣間見えるため食べ物を分ける契機にもなるが、毎日関わるからこそ、常に気前よくはいられず、摩擦やゴシップも生む。日常の生活が紡がれていく緊密な近隣社会で、女性たちが親密さと緊張や摩擦とを行き来しながらいかに共在するかを描いた点は、アフリカにおける個人と社会をめぐる議論に一石を投じるものである。

第三に、本研究は、参与観察と語りの収集、食事記録や訪問者の記録、167人の女性へのインタビュー、市場や露店の調査、史資料の収集など、様々な調査手法を駆使しながらモザンビーク島という特徴的な場所について包括的なデータを得た点で、極めて高い価値を持つ。インド洋圏と大西洋圏をつなぐ航路の要衝であり、ポルトガルの勢力圏・植民地の根拠地・行政の中心であった同島、そして被支配者であるマクア・ナハラ

の人びとの居住地区バイロの歴史を、モザンビークに加えてポルトガルなどで幅広く渉猟した史資料を踏まえて叙述した点は高い評価に値する。また、女性たちの住居に身を置いてその日常を仔細に参与観察したことによって、隣人どうしのやり取りや関係の機微と変化を描くことが可能となった。食のやり取りも記録し、日常における食の購買、消費、授受の詳細を把握した。さらに、バイロの一地区の家族について綿密な悉皆調査を実施し、167人もの女性への聞き取りから、バイロの世帯構成、生業・所得源の構成、住居の所有や相続、ゴシップに対する価値観、隣人・友人・親族との社会関係などについて多面的な情報を得た。加えて、内陸に広がる食材の調達ルートについても調べている。これらの多次元の調査の結果、現在のモザンビーク島及びバイロにおける人びとの相互の関係が、どのような歴史の流れの末に、またどのような経済的基盤の上に展開しているかが、説得的に示されている。本研究は、今後同島及びバイロについて研究する者にとって、必ず参照すべき道標となる業績だと言ってよい。これまで研究蓄積の少なかったモザンビーク島の特異性をミクロな社会関係も含めて立体的に描き出したことは、アフリカ都市研究にも極めて重要な貢献となる。

ここで述べたことで自明なように、既存の議論への貢献、対象地の選定と位置づけの的確さ、視点の設定の独自性、また調査の綿密さに示された著者の研究能力は卓抜なものであると言ってよい。

以上のような、著者の研究の成果と意義に照らして、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2022年2月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、著者の本論文の研究対象及び関連の研究に関する理解は深く的確で、今後果たしていくべき研究の課題についても自覚していることを認め、調査委員は一致して合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。